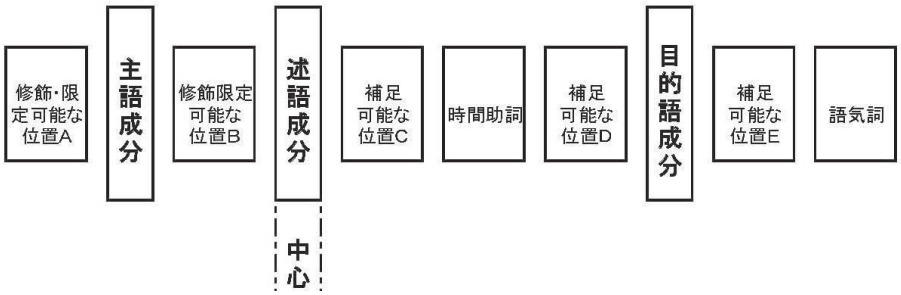
中国語の“把”構文の習得について

劉　　志　偉

0. はじめに

一般的に中国語は屈折のない言語とされている。そのため、その語順は、理論上「視覚的」に理解されうる。「視覚的な語順の学習方法」とは、まず中国語の語順を順番の決まった大きさの異なる箱の並びに例え、これらの箱に、個々の単語やフレーズを書いたカードを入れるようにして、語順を習得する学習法のことである。中国語の学習において単文の語順は、個々の単語やフレーズを文成分（「一語文」を除く）の構成要素と見なし、それらの順番を決めてゆく作業によって習得できる。そして、複文に関しては、個々の単文が大きな文成分の構成要素となり、その形態より鎖型、箱入れ型、そして両者の複合型の３つのタイプに分けられる。こうした体系的な理解を踏まえた上で「視覚的」に語順を習得するという考え方に基づき、劉（2008、2011）は（図1）のような文構造を提案した。



（図 1）

本稿で扱う“把”構文についてもこの構造をもって体系的に捉えることができる。“把”構文とは、本来、（図 1）の目的語成分にあるべき名詞（節）[1] を「把＋名詞」の形で B ケース（修飾限定可能な位置 B）に移動させて用いられる中国語の特徴的な構文の一つである。「把」は介詞（「前置詞」とも）で、多くは日本語の助詞「を」に相当する。また、「把」と同様の機能を持

つやや固い表現として「将」がある。「将」を含む構文も広義の“把”構文として理解することができる。一般的には次のような形となる。

（主語）＋「把」＋名詞（目的語成分）＋動詞＋他の成分

この構文は、日本語母語話者にとって馴染みの薄い表現であり、学習者には、まず日本語の構文との異同を示しておく必要がある[(2)]。「把＋名詞」は「名詞＋を」として訳されることが多いが、「把」が日本語の助詞「を」に完全に対応しているわけではない。移動場所格用法の「を」は「把」に訳されることがない。たとえば、「中間地点を通過した。」は「*把中点通过了。」に訳されず、「通过了中点。」に訳されるのが普通である。また、「把」が「を」に訳されない場合もある。たとえば、「把门上了锁。」は「扉に鍵をかけた」と訳され、「把」は日本語の「に」に相当する。本稿は上記のような場合を除いて、「把＋名詞」が「名詞＋を」に対応する場合のみを対象とする。そして、“把”構文と「他の成分（いわゆる補語成分が中心）」[(3)]との関わりを体系的に示しつつ、“把”構文の本質を明らかにする。また、考察にあたって「把＋名詞」の「名詞」が目的語成分の位置に戻せるか否かという点を軸に論を進めたい[(4)]。なお、“把”構文と共起する動詞については本稿においては詳しく言及しないことを予め断っておく。

1. 名詞を目的語成分の位置に戻すことのできる諸タイプ

中国語の教育現場で“把”構文を教える際には、主に“把”構文がどのような表現と共起するのかに焦点を当てているように思われる。本節ではまず名詞（節）が目的語成分のケースに戻せるタイプとして、結果補語、数量詞補語、方向詞補語のそれぞれと共起する“把”構文の３つのパターンを取り上げる。また、アスペクト助詞の「了」･「着」や、動詞の重ね型と共起する“把”構文については、結果補語と数量詞補語との連続性から考察することとする。

1.1.1　結果補語と共起する“把”構文

結果補語と共起する“把”構文の場合、Bの位置の前に置かれた名詞（節）は目的語の位置に戻すことができる。たとえば、

（1）你先把这杯酒喝完。

（まずはこの酒を飲み干しなさい。）

は次の（2）のように言い換えられる。

（2）你先喝完这杯酒。

「喝完」は日本語の「飲み終える」に直訳できることから考えてもわかるように、結果補語「～完」は動詞「喝」と結合してより大きな動詞を形成している。そして、「这杯酒」はこの大きな動詞の目的語成分である。（1）のように“把”構文を用いて「这杯酒」を前置させることで、ほ

かならぬこの一杯（のお酒）という限定若しくは排他的な表現効果がもたらされている。

1.1.2　アスペクト助詞の「了」と共起する“把”構文

“把”構文は完了の意を表すアスペクトの助詞「了」とも共起する。たとえば、

(3) 我已经把你的工作服洗了。

（あなたの作業着はもう洗ったよ。）

これも結果補語の場合と同様、名詞（節）を目的語成分の位置に戻すことができる。

(4) 我已经洗了你的工作服了。

「了」は一般的にアスペクト助詞として扱われているが、それ自身の表す完了の意味が一種の結果として解釈できるため、結果補語と意味上の連続性が捉えられる[5]。したがって、上述の結果補語の場合と同様、話し手の意図によって、“把”構文を用いることで目的語成分を限定的に若しくは排他的に表現することができる。

また、「裸動詞＋了」で日本語の「V＋てしまう」の意に相当する“把”構文も存在する。この場合も同様である。

(5) 你怎么把葡萄酒开了？

（なぜワインを開けてしまったの？）

(6) 你怎么开了葡萄酒呀？

1.1.3　アスペクト助詞の「着」と共起する“把”構文

“把”構文における動詞がアスペクト助詞の「着」と共起することがある。「着」は日本語の持続相に相通ずる部分があり、一種の持続的な結果を表すため、結果補語との連続性を有する。ただし、「着」を伴う“把”構文は主に命令文、希求文に用いられ、述語となる動詞も限られている[6]。

(7) 等会儿、你把包拿着！

（ちょっと待って、カバンを持ってて。）

この場合も名詞を目的語成分の箇所に戻すことできる。

(8) 等会儿、你拿着包！

1.2.1　数量詞補語と共起する“把”構文

数量詞補語を伴う“把”構文も名詞（節）を目的語成分の位置に戻すことができる。たとえば、

(9) 你只要把这个句子再念三遍就会明白了。

（この文をあと三回読めば意味が分かるようになる。）

この「三遍」は、一般的には動詞に対する補語として理解されるが[7]、数量詞補語を認めない立場からすれば、数量詞と目的語を表す名詞（節）が一体化し、大きな目的語成分を構成するとも捉えられる。したがって、(9) の「这个句子」は目的語成分の一部分が前置された構文と考

えられ、それを本来の目的語成分のケースに戻せば次のようになる。

（10）你只要再念三遍这个句子就会明白了。

1.2.2　動詞の重ね型と共起する“把”構文

“把”構文は動詞の重ね型とよく共起する。たとえば、

（11）先把手洗洗。

（まず手を洗ってください。）

このような動詞の重ね型と共起する“把”構文の名詞（節）も目的語成分の位置に戻すことができる。

（12）先洗洗手。

動詞の重ね型は一見数量詞補語とは無関係であるが、「動量詞」タイプの数量詞補語として理解することができる。動詞の重ね型「VV」[8]は「V一V」とも言える。たとえば、この場合、「洗洗」と「洗一洗」は同等の表現であり、「洗一洗」の「一洗」は、動詞を借りて臨時的に量詞の役割を果たしており、「洗一下」の「一下」の類義表現の一つであると解釈することができる[9]。このように動詞の重ね型と共起する“把”構文は、1.2.1 に述べた数量詞補語と共起する“把”構文に通ずる。

1.3　方向詞補語と共起する“把”構文

方向詞補語は補語を便宜的に説明するための名称であり[10]、その内実は結果補語に相通ずる点があり、結果補語と同様、述語成分に対する一種の結果性を表す表現である。したがって、方向詞補語と共起する“把”構文は、基本的に 1.1.1 に述べた結果補語と共起する“把”構文と同様に、前置された名詞（節）を目的語成分の位置に戻すことができる。

（13）你明天能不能把那本书带来？

（明日例の本を持ってきてくれる？）

（14）你明天能不能带那本书来？

このように、結果補語（アスペクト助詞「了」「着」を含む）、数量詞補語（動詞の重ね型を含む）、方向詞補語のいずれかを伴う“把”構文の場合、その名詞（節）を目的語成分の位置に戻せる場合がきわめて多い。さらに、結果補語と方向詞補語は、共に結果性を伴うものとして捉えることができる。したがって、この二つの補語は、述語成分に入る動詞と複合して更に大きな述語成分を形成する要素と理解されるため、“把”構文を用いる場合、目的語成分は完全に前置することができる。これに対し、いわゆる数量詞補語は[11]、量を表す表現は目的語と一体化し、より大きな目的語成分を構成するものと考えられる[12]。そのため、数量詞の補語の場合は、目的語成分の部分的な前置と理解することができる。“把”構文はそもそも「処置」を表す構文とされる。目的語成分の前置は、その名詞（節）をBの位置に移動させることにより、目的語成

分を限定若しくは排他的に明示する表現効果を持つと同時に、「動詞＋他の成文」が表す広い意味での結果（完結や持続などの状態を含む）をも示すことができる。こうした表現効果を求めない場合はそれを本来の目的語成分の位置に戻し、目的語成文を伴う叙述文にすることができる。なお、目的語成分を前置する“把”構文と、それを前置しない文とのニュアンスの違いについては3節で後述する。

2. 名詞を目的語成分の位置に戻せない（戻しにくい）タイプ (13)

先に考察した結果補語、数量詞補語、方向詞補語と共起する“把”構文とは対照的に、以下に述べる様態補語と前置詞補語とは、共起する“把”構文の名詞（節）を、目的語成分の位置に戻せない（戻しにくい）性質を持っている。

2.1 様態補語と共起する“把”構文

様態補語と共起する“把”構文としては、(15)（16）のような例が挙げられる。

(15) 服务员把房间打扫得一尘不染。

（従業員は部屋を塵一つなくきれいに掃除している。）

(16) 她总是把自己打扮得漂漂亮亮的。

（彼女はいつもお洒落な格好をしている。）

様態補語は中国語の特徴的な構文の一つである。文が表す情報の焦点は目的語成分ではなく、その様態という要素にある。たとえば、(15) の場合、述語成分である「打扫」に対して、その対象が「部屋」であることではなく、「塵一つなくきれい」という状態を表現することに重点が置かれている。(16) も（15）と同様、「自分」をお洒落にすることを言うのではなく、述語成分の「打扮」に対して「いつもお洒落」という状態に重点を置いて表現されている。ここでもし名詞（節）を目的語成分の位置に戻すと、目的語と様態の二つの情報が述語成分に後続することとなり、文の表す情報の焦点が不明瞭になる恐れが生じるため、様態補語と共起する“把”構文の名詞（節）は目的語成分の位置に戻せないのである。様態補語と共起する“把”構文の場合、名詞が目的語成文に戻せないのは、構文機能によるものである。

2.2 前置詞補語（セット補語）と共起する“把”構文

前置詞補語と共起する“把”構文としては以下のような例が挙げられる。

(17) 由于出门时过于匆忙，我把手机忘在家了。

（家を出たときあまりに慌てていたため、携帯を家に置いてきてしまった。）

(18) 请把这份资料交给负责人。

（責任者にこの資料を渡してください。）

前置詞補語は、「前置詞のセット」を用いて述語成分に対して（過去・現在・未来目標）の帰

着点を表す表現である[14]。用例（17）は「携帯」を忘れたことより、携帯がいま「家に」あるという現在の帰着点に重点を置いて表現されている。一方、用例（18）も「資料」を渡すことを言うのではなく、（未来に向けて）目指す帰着点が「責任者に」であることを明示している。日本語では「家に」「責任者に」が動詞の前に位置するのに対し、中国語の場合、これらが結果事実或いは目指す目標として帰着点と解釈しうるため述語成分に後続する位置に置かれるのである。上述した様態補語と共起する“把”構文と同様に、目的語成分をBの位置の前に置かなければならないのは文の表す情報の焦点が不明瞭になることを避けているためである。

以上、前置される“把”構文の名詞（節）を目的語成分に戻せないあるいは戻しにくい補語の種類として様態補語と前置詞補語を挙げた。この二タイプの補語表現は、いずれも述語成分に対応する目的語成分に焦点をあてた構文ではなく、述語成分に対し具体的な様態若しくは前置詞のセットが示す情報を付け加えることに焦点をあてた構文であり、共に日本語の構文発想と異なる。目的語成分に属する名詞（節）をBの位置へ移動させなければ、述語より後ろの箇所に重要情報が重なり、文の表す焦点が不明になってしまう恐れが生じる。これは1節で述べた表現意図による目的語成分の前置とは異なり、構文構造上の理由による目的語成分の前置なのである。

3. その他の注意点

ここでは、程度補語と共起する“把”構文の内実、可能補語が“把”構文と共起できない理由、“把”構文と目的語成分がAの位置に前置される構文との関わり、通常の目的語成分を伴う叙述文と“把”構文によるニュアンスの差、について考察を加えたい。

3.1 程度補語と共起する“把”構文

程度補語は他のタイプの補語とは異なり、やや複雑な様相を呈するものである[15]。いわゆる程度補語と呼ばれるものは意味上の名称にすぎない。一般的に程度補語とされる以下の用例は、それぞれ、結果補語、数量詞補語、様態補語としても解釈でき、全て意味上一種の程度を表すものと理解することができる。

（19）这天可把我热死了[16]。
　　（暑すぎて死にそう。）

（20）请把你的行李挪一下。
　　（ちょっと荷物を動かしてください。）

（21）可以再把水放大一些吗？
　　（もう少し水を強めに出して貰えるか？）

（22）紧密的日程安排把大家累得要命。
　　（ハードなスケジュールでみんなは死ぬほど疲れた。）

これらの用例は程度補語としても理解が可能であるが、用例（19）は結果補語、（20）（21）は数量詞補語、（22）は様態補語としても捉えられる。1節と2節で検討した結果に従えば、（19）（20）（21）は名詞（節）を目的語成分の位置に戻せるのに対し、（22）の名詞（節）は目的語成分に戻せないのである。

3.2　可能補語はなぜ“把”構文と共起できないのか

可能補語は、“把”構文と共起できない。たとえば、次の（23）は誤用である。

（23）＊我把这些饺子吃得完。

（餃子、全部食べきれるよ。）

可能補語は名称の文字通り、動作の結果を表すものではなく、具体的な結果の実現が可能か否かを示すものである。しかも、可能の意を表す助動詞「能」に比べて、可能補語のほうがより客観的な条件に基づく可能性の正否判断である。したがって、「全部食べきれるよ」のような主観的な判断は基本的に主観的な判断を表す助動詞「能」を用いて、次のように表現されなければならないのである。

（24）我能把这些饺子吃完。

3.3　“把”構文と目的語成分のAの位置に前置される構文との関わり

目的語成分を前置する“把”構文、即ち本来、目的語成分の位置にあった名詞（節）はBの位置に移動させるほか、Aの位置に移動させる場合もある。名詞（節）をBの位置へ移動させる場合は、必ず「把」若しくは「将」を伴わなければならないのに対し、Aの位置への移動は「把」若しくは「将」を伴う必要がない。

（25）妹妹把我的词典借走了。

（妹は私の辞書を借りていった。）

（26）我的词典妹妹借走了[17]。

（辞書、妹が借りていった。）

（26）は、名詞（節）をBの位置に移動させることにより、ほかならぬ「私の辞書」と「借りていった」という結果事実（現状）の二つの情報を、述語成分を挟んで同時に表している。「把＋名詞」は目的語成分を明示する役割を持つ。一方、（27）の場合、名詞（節）がAの位置に置かれ、主題としての役割を果たしているのである。形態上「把」若しくは「将」を伴わない点では“把”構文と区別されるが、目的語成分である名詞（節）に焦点をあてるという点で、両者は一致しており、この2つの構文は連続的に捉えることができるのである。さらに一歩進めれば、目的語成分の名詞（節）をAの位置に前置する構文は“把”構文の一変種ともいえるのである。

3.4　通常の目的語成分を伴う叙述文と“把”構文とのニュアンスの違い

1節で触れたように、“把”構文の中には、名詞を目的語成分の位置に戻すことができるタイ

プがある。このタイプの“把”構文と、通常の目的語を伴う叙述文との違いはどこにあるのだろうか。これを明らかにすれば、表現意図による使い分けが可能となる。

（27）我把爸爸的杯子打碎了。

（お父さんのコップを割ってしまった。）

（28）我打碎了爸爸的杯子。

（わたしはお父さんのコップを割った。）

両者が言及している事実は同じであるが、（27）は“把”構文を用いて「杯子」を前置させることで「ほかならぬ、お父さんのコップ」と「割ってしまったという結果（状態）」を、二つの重要情報を同時に示している。これに対し、（28）は主語である「わたし」が「お父さんのコップを割った」という事実を述べるのみで、その結果として「困っている」「後悔している」といったニュアンスは読み取れない。（27）（28）はともに文法的に間違っていないが、ネイティブであれば、（27）を用いるのが自然である。

4. おわりに

言語事実としての“把”構文はその名詞（節）が目的語成分の位置に戻せるものと戻せないもの（戻しにくいもの）の二つに分けられる。本稿において筆者は補語表現との関わりを手がかりにその本質を捉えようと試みた。

具体的に、前者、目的語の位置に戻せるものとしては、結果補語、数量詞補語、方向詞補語が挙げられる。これに対し、戻せないもの（戻しにくいもの）には様態補語、前置詞補語の二つがある。

そして、程度補語と呼ばれるものについては改めて考察を行った結果、目的語成分に戻せるタイプの“把”構文は、目的語成分に属する名詞（節）を限定若しくは排他的に明示すると同時に、結果情報にも焦点をあてるという表現意図を持って前置される構文であるのに対し、目的語成分に戻せない（戻しにくい）タイプの“把”構文は、構文構造上の理由によって前置される構文であることがわかった。

さらに、可能補語と“把”構文が共起しないのは、可能補語の持つ意味機能に起因することを明らかにした。

また、従来の研究では“把”構文として扱われて来なかった目的語成分がAの位置に前置される構文（目的語の主題化構文）を“把”構文の一変種として理解することによって、体系的に“把”構文を捉えることができることを明らかにした[18]。その結果は次の（表1）のように示される。

（表 1）

<table>
<tr><th>文の種類</th><th colspan="2">語順等</th><th>用例</th></tr>
<tr><td>通常の叙述文</td><td colspan="2">S + V（他の成分を含む）+ O</td><td>我打碎了爸爸的杯子。</td></tr>
<tr><td>A の位置に前置される構文</td><td colspan="2">O + S + V（他の成分を含む）</td><td>我的词典妹妹借走了。</td></tr>
<tr><td rowspan="11">“把”構文
（B の位置に前置される構文）</td><td rowspan="8">名詞を目的語成分の位置に戻せるもの</td><td>結果補語</td><td>你先把这杯酒喝完。</td></tr>
<tr><td>了</td><td>我已经把你的工作服洗了。</td></tr>
<tr><td>着</td><td>等会儿、你把包拿着！</td></tr>
<tr><td>数量詞補語</td><td>你只要把这个句子再念三遍就会明白了。</td></tr>
<tr><td>動詞の重ね型</td><td>先把手洗洗。</td></tr>
<tr><td>方向詞補語</td><td>你明天能不能把那本书带来？</td></tr>
<tr><td rowspan="3">程度補語</td><td>这天可把我热死了。</td></tr>
<tr><td>请把你的行李挪一下。</td></tr>
<tr><td>紧密的日程安排把大家累得要命。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">名詞を目的語成分の位置に戻せない（戻しにくい）もの</td><td>様態補語</td><td>她总是把自己打扮得漂漂亮亮的。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">前置詞補語</td><td>请把这份资料交给负责人。</td></tr>
<tr><td></td></tr>
</table>

注

（1）　名詞または名詞節を指す。他品詞やフレーズによる名詞相当のものも含まれる。たとえば

・今年夏天他把滑冰学会了。

（今年の夏、彼はスケートをマスターした。）

・大家都把在 4 月底完成这项任务作为今年的第一目标。

（みんな 4 月月末にこの任務を果たすことを今年の第一の目標としている。）

「滑冰」と「在 4 月底完成这项任务」は日本語でそれぞれ「スケートをすること」と「4 月月末にこの任務を果たすこと」と訳されるように全体が名詞相当のものとして考えられる。

（2）　日本語そのものの構文特徴などを利用しつつ、日本語と中国語の発想の違いが顕著に見られるものを明確にすることにより、中国語母語話者でなくてもある程度の語順正否の判断が可能となる。従来の日本における中国語教育文法とはやや異なる角度から考える筆者の研究は中国語教育文法の研究のみならず、日中言語対照研究にも寄与できることを目指している。

（3）　中国語の補語は一般的に 7 種類に分けられる。詳しくは劉（2008）を参照されたい。

（4）　学習者にとってはなぜ、そしてどのような場合目的語成分が前置しなければならないのか、前置しない構文との違いはどこにあるのかについてが理解しにくい点であろう。

（5）　完了の意を表す「了」と結果補語を意味上の連続性を有するものとして考えれば、「結果補語 + 了」の形を伴う“把”構文が多いことについても納得がゆく。

・我把这块儿早就走遍了。

（このあたりはとっくに歩き回った。）

・才傍晚 5 点妈妈就把晚饭准备好了。

（まだ夕方 5 時だというのに、母はすでにご飯を用意してしまった。）

（6）　劉ほか（2001：731）によれば、「背」や「放」等ごく一部の動詞に限られる。

（7）　数量詞補語を認めない立場もあり、筆者もこの立場である。

（8）　V が「打扫」のような二文字の場合、「打一打扫」の形になる。

（9） 動量詞型の数量詞補語と共起する“把”構文としての「先把手洗一下」は「先洗一下手」に置き換えることができる。

（10） 劉（2008）を参照されたい。

（11） 劉（2008）にも述べたように、補語の名称は理解の便宜上のものにすぎず、その本質を捉えた命名ではない。筆者は数量詞補語を認めない立場を取っている。

（12） ただし、必ずしも量を表す表現が名詞と修飾・被修飾の関係をなすとは限らない。

（13） 補語成分ではなく、述語が「加以＋V」や「V化」等の場合も名詞を目的語成分に戻すことができない。前者の動詞は日本語のサ変動詞にあたるもので、「～を行う」と訳される。後者は「～化する」に相当する。日本語の自動詞・他動詞とは対応しないため、動詞の自他という概念は必ずしも中国語の学習に有効であるとは言えない。たとえば、「～化する」は日本語では他動詞であるが、「V化」は中国語では目的語を要しない自動詞である。したがって、次の用例における「把＋名詞」は日本語の「～を」と訳されるが、「～化」の目的語には当たらないのである。

・（文艺）把其中的矛盾和斗争典型化。（劉 2001：749）

（（文芸）は中の矛盾と闘争を典型化する。）

（14） 筆者は、日本語の「名詞＋助詞類」の多くが中国語の「前置詞＋名詞」に相当することから、これらを一つのまとまりとして捉えるほうが有効であると考え、「前置詞＋名詞」を「前置詞セット」と名付けたのである。詳しくは劉（2011）を参照されたい。

（15） 劉（2008）を参照されたい。

（16） 「很」と「极」を伴う程度補語は、“把”構文と共起しない。

（17） 受身文の「我的词典被妹妹借走了。（妹に辞書を借りられてしまった。）」とはまた区別される。（26）の主語は「妹妹」で、述語は「借走」あるのに対し、受身文の主語は「我的词典」で、述語は「被」である。本稿は劉（2011）と同様、「被」を受身動詞と見なす。

（18） 筆者は語学の文法に関する説明（ここでは中国語文法の説明）、ひいては個々の文法ポイントの説明についてただ細かい用法を羅列して説明するだけではなく、体系的に示すことが重要であると考える。

参考文献

（日本語）

相原茂・石田知子・戸沼市子 1996『Why? にこたえるはじめての中国語の文法書』同学社

荒川清秀 2003『一歩すすんだ中国語文法』大修館書店

今冨正巳 1988『新訂中国語日本語翻訳の要領』光生館

遠藤紹徳 1989『中←→日翻訳表現文法―中文日訳・日文中訳の原点とテクニック―』バベル・プレス

神谷修 1982「試論「把」字句及其日語訳法」『中国語学』229

木村裕章 1996「「把」字句と目的語前置文の比較分析」『中国語学』243

洪潔清 2009『疑問解決の参考書　どうしてそうなる？中国語』白帝社

香坂順一 1989『文法からの中国語入門』光生館

輿水優 1985『中国語の語法の話ー中国語文法概論ー』光生館

輿水優・島田亜実 2009『中国語わかる文法』大修館書店

朱德熙 1995『文法講義―朱德熙教授の中国語文法要説―』（杉村博文、木村英樹訳）

杉村博文 1994『中国語文法教室』大修館書店

鈴木達也 1975「把字句について」『中国語学』221

鈴木晴子 1988「「把字句」の機能的分析」『中国語学』235
西川和男 2005『中国語の誤用分析―日本人学習者の場合―』関西大学出版部
馬大愚 2009「中国語の「把」構文と日本語の「主語 + 目的語 + を + 動詞」構文との対照」『拓殖大学語学研究』121
彭飛 2002「日本語の他動詞文と中国語の「把」を伴う動詞文の相違をめぐって（特集 外から見た日本語）」『日本語学』21―8
丸尾誠 2010『よくわかる中国語文法―基礎から発展まで―』アスク出版
望月八十吉 1974『中国語と日本語』光生館
守屋宏則 1995『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店
安井二美子 1997「「把」構文に於ける目的語について」『中国語学 』244
安井二美子 1999「「把」構文述部における必要条件」『中国語学 』246
劉月華ほか 1996『現代中国語文法総覧』（片山博美ほか訳）、くろしお出版
劉志偉 2008「日本人の中国語勉学に関する小考（続）」『かりん』創刊号、京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館
劉志偉 2011「中国語における文の中核的な述語に先行する要素の配置について」『類型学研究』3、類型学研究会
呂淑湘 2003『現代漢語八百詞増訂版（日本語版）』東方書店

（中国語）

範曉 1998『漢語的句子類型』書海
房玉清 2001『実用漢語語法（修定版）』北京語言大学出版社
劉月華ほか 2001『実用現代漢語語法（増訂本）』商務印書館
王力 1985『中国現代語法』（上・下）商務印書館
趙元任 1979『漢語口語語法』商務印書館